

道徳科

新保 拓実

1 道徳科における他者とともに編む子供とは

自分の経験や迷いを素直に語り、互いの考え方や感じ方を交流する中で、自己の道徳的価値観のよさに改めて気付いたり更新したりする子供である。

「自分の経験や迷いを素直に語る」とは、教材を通して、登場人物の考えや行動について自分だったらどうするかを考えたり、自分のこれまでの経験や日常生活と照らし合わせたりする中で生まれてくる疑問や葛藤、人の弱さに対する気付きを自分の言葉で言い表そうとする姿のことである。

これまでの実践から、子供は、登場人物の姿や友達の考えと自分の考えとを比べながら、「自分だったらどうするだろうか」「これでよかったのだろうか」と、自分の生活経験と照らし合わせて道徳的諸価値について考え、自分の思いを伝えようとする姿が多く見られてきた。こうした思いが生まれるのは、自分のこれまでの行動や大切にしている道徳的価値観を見つめ直す中で、うまくできていない自分や迷っている自分に気付くからである。そして、子供は、教材の中に内在する道徳的価値について「そうすべきだ」と分かっているながらも、実際の生活経験を振り返ることで、「正しいと思っけていてもできない自分の弱さ」に目を向けるようになる。このとき、それまで当たり前のように捉えていた自己の道徳的価値観が揺らぎ始め、子供は「これでよいのだろうか」「どう考えればよいのか分からない」と迷いながら、自己の道徳的価値観を見直し始める。しかし、その思いはすぐに言葉にできるものではなく、口ごもったり言いよどんだりすることが多い。それでも、自分の経験と結び付いた迷いや葛藤であるからこそ、子供はそれを伝えようとする。このような瞬間にこそ、子供は自分の経験に基づいた思いや迷いを素直に語ろうとするのである。

また、「互いの考え方や感じ方を交流する中で、自己の道徳的価値観のよさに改めて気付いたり更新したりする」とは、他者の考え方や感じ方に触れることで、それまで自分が大切にしていた道徳的価値観が揺さぶられ、自己の道徳的価値観を見直したり新たな見方を取り入れたりしていくことである。子供は、友達の発言やその背景にある経験に触れることで、「自分とは違う感じ方や考え方がある」と他者理解を深めていく。しかし、他者の考え方や感じ方は、すぐに受け入れられるものではなく、自分のこれまでの経験と照らし合わせながら、「自分はどう思うか」「自分は何を大切にしてきたのか」と自分と比較しながら考えを深めることとなる。このような自己理解を深めようとするとき、子供は、それまで自分の中で形成されていた道徳的価値観が揺さぶられたり、ほどけたりする。そして、他者の思いを手がかりにしながら、自分の経験と結び付け直すことで、自己の道徳的価値観が少しずつ更新されていく。このように、他者との関わりの中で自己の道徳的価値観を見直し、より納得のいく形へと変えようとする過程を経て、自己の道徳的価値観は更新されていくのである。

2 道徳科における「他者ととともに編む」子供を育てるには

① 自己の道徳的価値観が揺らぐ場をつくる手立て(個人の内面へのアプローチ)

教材を通して、登場人物の考えや行動について自分だったらどうするかを考えたり、自分のこれまでの経験や日常生活と照らし合わせたりする中で、自分の中にある思いや考えに目を向けられるようにする。そのために、子供の生活に近い場面や迷いが生まれた出来事を取り上げ、「自分だったらどうするか」と問いかけることで、自分の経験と結び付けて考えられるようにする。子供は、教材に含まれている道徳的価値について「そうすべきだ」と分かっているながらも、自分の生活を振り返ることで、「うまくできていない自分」や「正しいと思っけていてもできない自分の弱さ」に目を向けるようになる。このように、自分の中にある思いと実際の行動とのずれに気付くことで、それまで当たり前のように捉えていた自己の道徳的価値観が揺らぎ始める。さらに、一つの道徳的価値にまとめるのではなく、迷いや葛藤を含んだまま立ち止まって考える時間を保障することで、自分の中にある複数の思いに気付き、それらを行き来しながら考えられるようにする。このような関わりの中で子供は、自分の中にある思いに向き合いながら、自己の道徳的価値観を見つめ直していく姿が見られるようになる。

② 他者との関わりの中で自己の道徳的価値観を見直すための手立て(他者との関わりへのアプローチ)

他者の考え方や感じ方に触れ、それらを自分の経験と結び付けながら、自己の道徳的価値観を見直していくことができるようにするために、子供同士が自分の経験や思いを語り合い、多様な考え方や感じ方が交流できる場を設定する。例えば、ペアや少人数で互いの考え方や感じ方を語り合う場を設けることで、一人一人の具体的な体験や思いが表れやすくなるようにする。また、「どんな場面での出来事なのか」「そのときどんな気持ちだったのか」と確かめることで、発言の背景にある経験まで含めて理解できるようにする。さらに、「自分にも似たことはあるか」「自分だったらどうするか」と、自分の経験と結び付けて考えるよう促すことで、他者の考えを自分事として受け止められるようにする。さらに、異なる考えが出た場面では、「どうして考えが分かれたのか」「どちらの思いも分かるころはないか」と比べて考えることで、それぞれの立場の違いや大切にしていることに気付くことができるようにする。こうした関わりの中で、子供は、多様な道徳的価値観に触れることができるだろう。

このような他者との関わりを通して、子供は、「自分とは違う考え方や感じ方がある」ことに気づき、自分のこれまでの道徳的価値観と比べながら、「自分は本当にこれでよいと思うのか」「自分は何を大切にしたいのか」と自己理解を深めていく。そして、友達の言葉を手がかりにしながら、自分の経験と結び付け直すことで、自己の道徳的価値観を見直していくのである。

また、授業の終末においては、自分の内面に目を向ける振り返りの場や、ペアやグループで互いの思いを語り合う場を設ける。このような場を通して子供は、自分の考えの変化や深まりに気づき、「一人では気付けなかったことに出会えた」「友達と考えることで見方が変わった」といった実感をもつことができる。こうした実感は、学んだことを日常生活に生かそうとする意欲につながっていく。このように、他者との関わりの中で自己の道徳的価値観を見直し、より納得のいく形へと変えていく過程が、自己の道徳的価値観の更新につながる。

③ 「他者とともに編む」学びを支える関係性づくりの手立て

(「他者とともに編む」を支える前提へのアプローチ)

道徳科の学びは、授業の中だけで完結するものではなく、日常生活の中で子供がすでに発揮している思いや行動と深く結びついている。子供は、日常生活の中で、友達を気遣ったり、学級や学校のために行動したりするなど、多くの道徳性を発揮している。しかし、そのよさに自分自身では気付いていなかったり、道徳的価値として捉えきれていなかったりすることも多い。

そこで教師は、日常生活の中で発揮されている子供のよさに目を向け、それを互いに認め合える関係性を土台として、「他者とともに編む」学びが成立するようにしていく必要がある。そのために、まずは日常の関わりの中で子供一人一人の思いや行動に目を向け、その背景にある願いや大切にしていることを捉えることが大切である。例えば、友達のためにさりげなく行動している場面や、学級や学校のために続けて取り組んでいる姿に対して、「どうしてそうしようと思ったのか」「行動してみてどんな気持ちだったのか」と声をかけ、その行動の背景にある思いを引き出ししていく。そのようにして見えてきた子供のよさを、「〇〇さんのこういうところ、すてきだね」「あのときの行動、みんなはどう感じた？」と学級全体に広げることで、個人の行動を学級の中で価値付けていく。すると、子供は自分や友達のよさに気づき、そのよさを支えている思いや大切にしていることを、自分にとっても大事なものとして捉えるようになるだろう。そして、そのよさが学級の中で共有されるように関わることで、子供同士が互いの在り方を認め合える関係をつくっていく。

このような関係性の中でこそ、子供は自分の考えや迷いを安心して語り、他者の言葉にも耳を傾けようとするようになる。また、友達の考えを受け止めながら、「自分はどうありたいか」を見つめ直すような姿が生まれてくる。このように、日常生活の中で子供のよさを見取り、それを学級の中で生かしていく関わりを積み重ねることが、「他者とともに編む」学びを支える基盤となるのである。